

## 巻 頭 言

## 世界観と価値創造

会長 長島 明純

(創価大学教職大学院教授)

今年度の創価大学教育学会の総会で、創価大学教育学会の会長となりました、長島明純です。

前会長の小山先生が中心となり、学術団体としての形が整ってきたように思っておりますが、本会の更なる充実・発展に関して、この度、本会の運営委員となっていただけの学生と教員の皆様のお知恵を頂きながら、鋭意検討しております。しかし、会員の皆様方のお力添えをいただかなければ、本会の充実・発展は叶いません。どうかよろしくお願いいたします。

創価教育の源を形成した牧口常三郎先生は、その著『教授の中心的統合としての郷土科研究』などで、今生きている郷土と世界とを有機的に関連させながら、自分の生き方を考えさせる道德教育が必要だとし、その著『人生地理学』では、「自己と共に他の生活をも保護し、増長せしめんとする」「人道的な競争」の時代を向かえることを希求しておられました。そしてその発想の延長線上に、子どもたちが幸福になることを教育の目的とする『創価教育学』の構想が生れております。

このように牧口先生は、あるべき未来の時代の社会像を念頭に、その教育学を構想されましたが、今、我が国では、狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会像（Society 5.0）として、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）を目指そうとしています。

そのために、「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会」が作られ、そこでの議論が整理され、政府広報として、内閣府から発信されています。

この広報で国は、Society 5.0の社会では、IoT（Internet of Things）で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これらの課題や困難を克服したり、人工知能（AI）により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題を克服したりすることを実現するとしています。

なお、「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会」の報告では、この Society 5.0の社会では、A I等の先端技術が学びの在り方の変革を教育にもたらすとし、そこで求められる共通する力として、文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力が示され、Society 5.0の社会を牽引する人材像として、技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材、技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材などを示されています。また Society 5.0の社会において発揮されることが期待される、人間の強みとして、現実世界を理解し意味づけできる感性、倫理観や板挟みや想定外と向き合い調整する力、責任をもって遂行する力も示されています。

牧口先生は、その著『創価教育学体系』で「人間には物質を創造する力はない。われわれが創造できるものは価値のみである。いわゆる価値ある人格とは、価値創造力の豊かなものを意味する」とし、人間が価値を創造するということを前提に教育学を構想されましたが、我が国として、Society 5.0の社会を見据え、「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」を共通して求めら力として検討し始め、また、新たな社会を牽引する人材として、「価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材」の育成をしようとしているようです。

牧口先生の著『創価教育学体系』に示されている通り、牧口先生には、明治から昭和という時代に生きたという時代的制約や小学校の教員・管理者という立場上の制約などがあった上、その教育実践者としての教育研究活動は、日本の国家の戦争により獄死されたことで、未完に終わっております。

そして先生が逝去され75年を迎えようとしている今、未来を託す子どもたちのために、次の時代をどのような時代にすべきか真剣に考え、そのための教育学を「価値創造」という言葉を鍵概念として構想した、牧口先生の思考の道筋を、日本の政府が辿ろうとしているかのようにみえます。

Society 5.0の社会が、牧口先生が夢見た、「自己と共に他の生活をも保護し、増進せしめんとする」「人道的な競争」の教育のための社会に一步でも近づくよう、創価の名を冠した教育学を、実践と研究の両面で、更に実のあるものにしていきたいと念願するものであります。

このような価値を創造するためには、その基盤となる世界観についての吟味が不可欠であると思いますが、このような世界観の吟味について考えさせられる機会が今年の秋にありました。それは中国で開催された「全国学校外教育研究大会」に参加させて頂いた際に聞いた、フィンランドの大学教授の方の、自国の教育を通して、未来の教育モデルについて提案された講演でした。

フィンランドは自然が豊かな国であり、自然を大切にされているとのことでしたが、日本やアジアの文化の中にあるような、子どもを自然の一部と観るという視点は薄く、自然と人間との二元論の上で、自然を大事にする人間を育てるというような視

点が示されていたように思いました。

西洋の学問の出発点と言えらるゝ思っているプラトンの対話編の、パイドロスの終わりでソクラテスは、その地の神に実ある対話が出来たことを、感謝して対話を終えているなど、西洋の中にも古い時代には、自然が人間の近くにあったと思いますが、次第に、自然は畏怖し感謝する対象ではなく、支配すべき対象になってしまったように思います。

ソクラテスは、自分が知っている事と、知っていない事の分別を軸に、対話を重ねていったと思っておりますが、知っている事だけではなく、知っていない事も大事にするという考えもしっかりとあったように思います。ソクラテスは、自然という人間が知ることが難しい存在を知ろうとすると共に、いつまでも分からない事のある自然を愛しく思う、深い愛知の人であったように思いますが、このようなソクラテスの自然という存在としての意味の受け止め方は、西洋の文化の中で、次第に小さくなってしまったように思います。

「人道的な競争」の教育のための社会を成立させるためには、西洋の文明の出発点となっているソクラテスの価値を吟味し創造するという批判的思考を大事にしながら、様々な世界観や自然観、生命観を問うという教育的視点が今後更に重要になるのではないかと思っています。そして創価大学教育学会は、このよう教育的な問いを大切にし、人間的な深い学び合いの場を提供するなどしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。